

『ソドムとゴモラⅠ』における倒錯の二重のゲーム

黒 岩 裕 市

フランス文学と同性愛

フランス文学と同性愛の問題を考察する場合、まず頭に浮かぶのは、明示的に同性愛を語る文学作品の数の多さだろう。タイトルが示すように、このテーマの先駆的な論集である『同性愛とフランス文学』の序文には次のような一節がある。

「フランスは同性愛について論じる多くの作家を生み出しただけではなく、その作品が読者、批評家、とりわけ次の世代の若い作家たちに、同性愛へ関心を注ぐことを促し、時には強いような、驚くべき数の偉大な作家をも生み出した」⁽¹⁾

単に数が多いだけではないのである。ここで示唆されている作品相互の関係は、続けて以下のように論じられる。

「サドの多くの物語、ジッドの『コリドン』、ブルーストの『ソドムとゴモラ』のオープニング、コレットの『純粋なもの』と不純なもの、コクトーの『白書』、ジュネの『泥棒日記』、サルトルの『聖ジュネ』は、デイスクルの立場や形式の相違にもかかわらず、西洋社会の同性愛についての道徳的、知的な見方を形作り、時にはそれを根本的に崩壊させた数少ない主要なテキストの一部である。これらのテキストの多くは、それに先立つテキストによって、直接的に生み出され、おそらく、フランスにおける、明確な同性愛の間テキスト性のもつとも説得力のあるいくつかの

実例をもたらずだろう⁽²⁾

『ソドムとゴモラ』のオープニング(Ⅱ『ソドムとゴモラⅠ』、一九二二年)や『コリドン』(一九二四年)、『純粹なもの』と不純なもの⁽¹⁾(一九四一年)といった作品が、西洋社会の同性愛に対する見解を形成し、それに揺さぶりをかけた「主要なテキスト」であることが確認された上で、これら諸作品の「間テクスト性」が強調されている。実際、『コリドン』では、その序文の中で、ブルーストの「男、女の理論」が批判され、『純粹なもの』と不純なもの⁽³⁾では、ブルーストの「ソドム」は称えられつつも、「ゴモラ」には疑いの眼差しが向けられている。さらに、注意すべきことに、この引用の中で名前の挙げられているジッド、ブルースト、コレットらは、程度の差こそあれ、当時から有名であり、今なおその地位を失っていない。フランスでは、同性愛を主題とした作家、あるいは文学作品が主流の一部であり続けたのである⁽⁵⁾。

本論では、『同性愛とフランス文学』の序文でも「主要なテキスト」の一つに数えられ、ジッドやコレットも同性

愛を扱う場合、多かれ少なかれ念頭に置いていたと考えられる『ソドムとゴモラⅠ』を取り上げる。そして、そこで繰り広げられている男性同性愛の理論の特徴を明らかにすることで、『ソドムとゴモラⅠ』が同性愛に関する「主要なテキスト」たる所以を探ることを目的とする。ブルーストと同性愛の問題を正面から扱った、J・E・リヴァースの『ブルーストと愛の技法』、原田武の『ブルーストと同性愛の世界』、エリザベス・レイデンソンの『ブルーストのレズビアニズム』、また、イヴ・ゴフスキー・セジウィツクの『クローゼットの認識論』(特に第五章「ブルーストとクローゼットの見せ物」)も当然ながら『ソドムとゴモラⅠ』には言及している。だが、これらはブルーストの、あるいは『失われた時を求めて』全体の同性愛に取り組むことを命題としているため、『ソドムとゴモラⅠ』を体系的に論じてはいない。本論では、先行研究を参照しつつも、ブルーストの、あるいは『失われた時』全体の同性愛の問題(『ソドムとゴモラⅠ』で語られる「ソドム」の理論が、小説の他の部分でどれほど妥当性を持つかという問題、「ソドム」とは異なり、理論化されることなく小説の中で描かれる「ゴモラ」の問題等々)は基本的には保留とし、

『ソドムとゴモラⅠ』に限定して読解していくことにする。

「男・女」をめぐる(1)見出されたシャルリュス

『ソドムとゴモラⅠ』で語られる同性愛に対する基本概念は「ソドムの住人の中で、天からの火を免れた者たちの末裔である男・女たち (des hommes-femmes) の最初の出現⁽⁶⁾」というエピソードにすでに表れている。このテキストは一人称の語り手が「ソドム」の「末裔」である「男・女たち」に解釈をつけることで展開するのだが、具体的には、彼がシャルリュスという人物の新たな一面を発見することで幕が開く。

「太陽に向かってまばたきしながら、彼はほとんど微笑んでいるように見えた。私はそんなふうにいる状態でも、まるで自然のままの状態で見られた彼の顔に、あまりにも愛情深く、あまりにも武装解除された何かを見出したので、もしも人に見られているのを知ったなら、シャルリュス氏はどんなにか腹を立てただろうと考えずにはいられなかった。というのも、この男が私に考えさせたもの、あれほど男らしさに夢中になり、あれほどそれを誇っている

る男、彼にとつてはすべての人が忌むほど女性化して見えるこの男が、私に突然考えさせたもの——それほど、つかの間、彼はそのような顔立ち、表情、微笑みをしていただのだが——それは一人の女であつたのだ⁽⁷⁾」

「植物学者」⁽⁸⁾の位置に自らを置く語り手は、この場面ではシャルリュスに気づかれることなく、彼を観察することに専心する。一方、誰かに見られているという意識のないシャルリュスは普段の男性性の信仰者という姿からかけ離れ、その「顔立ち、表情、微笑み」は一人の女性を連想させるほどであることが指摘される。この一節に続いて、シャルリュスはジュピアンと出会うのだが、二人の接近の場面を覗き見、盗み聞くことで、語り手はシャルリュスに対して改めて自らの見解を述べる。

「しかも、少し前、(……) どうしてシャルリュス氏が女の様子をしているように思えたか今わかった。彼は一人の女だつたのだ！ 彼は、その見かけほど矛盾してはいないが、氣質が女のものであるというまきにそのために、男性的なものを理想とする人間たちの種族に属していたのだ。

彼らは外見においてのみ、他の男たちと同じような生活を送るのである⁽⁹⁾」

ここに至って、語り手の連想は確信に変わり、シャルリュスは「一人の女だったのだ」と断言される。それは彼の「気質」が「女のもの」であり、先ほどの引用に従うと、「顔立ち、表情、微笑み」に表れたからである。彼の肉体そのものは他の男性と変わらない。テクストの言葉を使えば、シャルリュスは「男一女」であり、そこには、同性愛を語る際に、当時の性科学者たちがしばしば唱えた「第三の性⁽¹⁰⁾」との共通点も見られる。

ところが、語り手の断定とは裏腹に、連想から確信へと至る短い間においても、シャルリュスを語る上で決定的に重要であるはずの彼の女性性は維持されていない。シャルリュスに見つめられたジュピアンは即座に「植物のように根が生えて」、「蘭」の雌花が「マルハナバチ」に対して見せるような「媚態」を示す⁽¹¹⁾。「マルハナバチ」と「蘭」の雌花は、それだけでは同性愛も異性愛も表さない。本来的にそれは「蘭」の雌花と雄花の異性愛の結びつきを第三者の「マルハナバチ」が媒介するという構図を示すからだ。

しかしながら、「蘭」の雌花の隠喩を与えられたジュピアンが女性性のイメージを一手に引き受けることは明らかである⁽¹²⁾。さらに、語り手は両者を雄と雌、二羽の鳥に重ね合わせた上で、ジュピアンを雌と言う。そうすると必然的にシャルリュスが雄ということになってしまう⁽¹³⁾。

このように、語り手が、シャルリュスの女性性に気づいてから、彼を「一人の女だったのだ」と言い切るまでの短いスペースにおいても、シャルリュスの女性性はきわめて不安定にしか描かれない。シャルリュスの中には男性性と女性性が混在し、必要に応じて、入れ替わり表に出てくるかのようなのである。

「男一女」をめぐる(2) 眠る男性

不安定な揺らぎを孕みつつも「男一女」という概念自体は、シャルリュスから、より一般的に、「若い男」の描写に受け継がれる。シャルリュス同様「武装解除された」状態である眠りの中で、「若い女、若い娘、自らを閉じ込めているこの男の体の無意識の中でほとんど目覚めていないガラテア」が、眠る男性の「表情」や「髪の曲がり具合」に表れる様子が描かれる⁽¹⁴⁾。その上で、語り手は同性愛の欲

望を次のように解釈する。

「(……) しかしながら、彼の中で、つる植物のように、どんな策略で、どんな敏捷さで、どんなしつこさで無意識だが目に見える女が男の器官を求めていることだろうか！(……) 彼の女の愛人は彼を罰し、閉じ込めるかもしれない。だが翌日、その男・女は他の男へ結びつく手段を見出してしまおう。まるでアサガオがつるはしや熊手のあるところに蔓を投げ出すように。この男の顔の中で、他の男たちが決して持っていないような我々を感動させる繊細さを、優美さを、愛想の中の自然さを称賛しながらも、この若い男がボクサーを求めていることを知ってどうして落胆することがあるだろうか。それは同じ現実の異なった側面だ。そのうえ、我々をむかつかせる側面がもっとも感動的であり、あらゆる繊細さよりも感動的なのである。というのも、それは自然の無意識の感嘆すべき努力を表わしているからだ。性の取り違えにもかかわらず、自分自身によって性を確認することは、社会の最初の誤りによって彼の遠くに置かれたものへ向かって逃れていくための口には出さない試みのように見える」⁽¹⁵⁾

この一節に従うと、眠る男性の中の「無意識が目に見える女」が、他の「男の器官」を強く求めることが、同性愛と言われるものの正体ということになる。「性の取り違え」という表現が示しているように、語り手は、ジェンダー倒錯と同性愛の差異をもとにして同性愛を語る。このテキストで、同じ(homo)というコノテーションを含む(homosexualité)が退けられるのはそのためでもある⁽¹⁶⁾。

さらに続けて、同性愛と見える行為は、「男・女」を魂ではなく肉体のほうの性に「取り違え」てしまった「社会の最初の誤り」を訂正し、本来の性に戻るための「自然の無意識の感嘆すべき努力」と解釈され、評価もされる。またここで、語り手は、内部に閉じ込められていた女性の魂が滲み出た男性の顔には「我々を感動させる繊細さ」「優美さ」「愛想の中の自然さ」が見られると言い、本来の性へ回帰するための努力(＝同性愛)を「感動的」と繰り返し形容する。同性愛の審美的な優位性も組み込まれているのだ。『ソドムとゴモラⅠ』には「美しさ」という語が散りばめられ、同性愛と巧みに結びつけられている⁽¹⁷⁾。

今、取り上げた「自然(nature)」の無意識の感嘆すべき努力」だけではなく、引用部分では「自然さ(nature)」

「nature」⁽¹⁸⁾といった語が鍵となっており、アサガオの比喻も登場する。シャルリュスとジュピアンも「マルハナバチ」と「蘭」に、あるいは二羽の鳥に重ね合わされていた。『ソドムとゴモラー』では同性愛を動植物や自然界の現象に重ねた表現がしばしば見られる。一見、自然に反するという結論を導き出しそうな「男・女」に対して、語り手は惜しみなく自然のイメージを与えるのである。

だからといって、『ソドムとゴモラー』で同性愛の自然化が図られていると即断してはならない。シャルリュスとジュピアンの出会いの途中では、容易周到に次のような指摘がなされている。

「しかし、この場面はまったく滑稽というわけではなかった。そこには、だんだん美しさを増していく奇妙さのあるいはお望みならば、自然さの刻印が押されていた」⁽²⁰⁾

同性愛の「美しさ」が示唆されつつも、「自然さ」の前にはしっかりと「奇妙さ」が置かれているのである。同性愛は、テクストに唐突に出てくる「クラゲ」⁽²¹⁾のように、「奇妙さ」と「自然さ」を同時に持ち、解釈する者の見方

でどちらにも転じる二重の存在として描かれている。同性愛の「奇妙さ」あるいは「自然さ」のどちらかだけを求める読者は、ある場面では満たされながらも、最終的には期待を裏切られることになるだろう。言い換えれば、語り手は、同性愛にまつわる「奇妙さ」あるいは「自然さ」といった概念と戯れながら、それぞれの既成の枠組みを攪乱し、骨抜きにしてしまうのである。

病理化された同性愛と古代ギリシア

一方、このテクストで、同性愛の「奇妙さ」と呼応するのが病理のイメージである。同性愛と病気の関係については、「(……)彼ら「同性愛者」が愛と呼んでいたものは(……)彼らを選んだ美の理想に由来するのではなく、治らない病気に由来するのだ」⁽²²⁾と端的に示す一節もある。その「病氣」が「治り得る」場合も示唆されているものの、テクスト全体としては「治らない」方向に傾いている。

シャルリュスの女性性が彼の「気質」に起因するという指摘もあつたが、その「気質」は「少し狂った」⁽²³⁾ものであることも示されている。「男・女」の肉体に閉じ込められている女性は「ガラテア」のような優美な表情だけではなく、

「ヒステリー患者の癡癡⁽²⁶⁾」をも露にするのである。ここでも「男・女」の二重性が際立つ⁽²⁷⁾。

さらに、「気質」の問題は、シャルリュスとジュピアンをロミオとジュリエットに重ね合わせる一節で、次のように述べられる。

「このロミオとジュリエットは当然、彼らの愛はつかの間の気まぐれではなくて、彼らの気質の調和によって準備された本当の宿命であると考えることができようし、彼ら自身の気質によってではなく、彼らの先祖たちの気質、そのはるかに遠い遺伝によって準備されたのだと考えることもできるだろう⁽²⁸⁾」

この一節からは、同性愛は同性愛者自身の生まれつきの「気質」によるもので、「遺伝」によってもたらされると言う考え方がはつきりと読み取れる。しかしながら、その「遺伝」は、当時、医学や性科学の分野で強調された退廃を表わすのではなく、むしろ「先祖」の復活を象徴している。それは、同性愛を一つの「種族」⁽³⁰⁾ととらえる語り手の見方にも繋がるものである。

ところで、このような同性愛の病理化に対抗する形で、当時しばしば、ワイルドの法廷での弁明やジッドの『コリドン』⁽³²⁾など、古代ギリシアの同性愛の習慣をモデルとし、男性同性愛を健全で男性的な行為だと主張する擁護論が唱えられた。『ソドムとゴモラ I』も古代ギリシアをモデルとする同性愛の理論の存在を完全に無視して話を進めることはできない。この問題に関して、語り手は次のように立場を明確にする。

「(……) 医者が虫垂炎を探すように、歴史の中にまで倒錯を探しに行き、ソクラテスは倒錯者の一人だということを思い起こし、喜ぶ(……)。同性愛が常態だった時には、異常者はいなかったということを考えずに(……)、汚辱のみが罪を作り出すということも考えずに。というのも、汚辱が生き残させたのは、生まれつきの非常に特殊な気質のため、すべての宣教、模範、罰に反抗する者たちだけだからだ⁽³³⁾」

同性愛が「常態」であつた古代ギリシアと、同性愛者を「異常者」と見なす現代の差が指摘され、安易に両者を混

同することが皮肉をこめて避けられる。眠る男性をめぐる描写で、同性愛者自身は「社会の最初の誤り」によって性を「取り違え」られた存在と定義づけられたが、ここでも同性愛を「汚辱」の中に陥れ、「罪」と規定する社会の側に問題が提起されている。このように、語り手は、主体となる同性愛者の内部に同性愛の原因を追求するだけではなく、同性愛をとりまく社会の側にも目を向けている。「ソドムとゴモラー」では、同性愛に対する社会学的な考察も行なわれるのだ。

同性愛の社会学(1)↳結びつき得ない同性愛

とはいえ、このテキスト全体に「罪」の意識は散りばめられている。タイトルにも用いられている「ソドム」の世界は、火と硫黄に縁取られた、滅亡を予期させる悲劇的な空間である。しかし、エピグラフの一文が予め示しているように、「天からの火」に焼かれた人ではなく、それを「免れた」人が語りの対象となる。結局のところ、同性愛者は滅びず、生きのびて「種族」を形成するのである。

同性愛者が「種族」となるためには、構成員として集団を作ることが必要であるが、語り手は次のように言う。

「(……) メンバーたち自身は、互いに知り合いになることを望んではいないのだが、自然の、あるいは習慣的なサインで、不意の、あるいは故意のサインで、すぐに互いにそうだと認識し合う(……)」⁽³⁴⁾

これは同性愛者の相互認知⁽³⁵⁾であり、この原理によってシャルリウスとジュピアンも出会う。しかも、孤独者が同性愛者は「ごく少数」⁽³⁶⁾しかいないと考えるのとは裏腹に、テキストではその数の多さが強調される。そうすると、同性愛者は問題もなく「種族」を形成するのではないかと推測できるが、語り手はそうは考えない。

「(……) 彼らは、「彼らの同類」に鏡の中に映し出されたありのままの姿を見るような嫌悪感を与える。その鏡はもはや彼らにはへつらわず、彼らが自らの中にあると認められなかったあらゆる欠点を際立たせる(……)」⁽³⁷⁾

同性愛者は、他の同性愛者にとって、自らの見たくない姿を映し出す「鏡」となるのだ。先ほどの引用にもしつかりと組み込まれていたが、そうだとわかって、根本的に

は「互いに知り合いになることを望んではいない」のである。他の同性愛者は「嫌悪感」を引き起こす自分自身の姿であり、忌避の対象となる。

また、眠る男性をめぐる一節で語り手は、男性の肉体の内部に捕えられた女性が他の男性を求めるというジェンダー倒錯と異性愛の構図で同性愛を解釈していたが、その考え方に従うと、男性同性愛者（Ⅱ「男一女」）は、異性愛の男性に向かうはずで、同じく「男一女」である他の同性愛者には向かわないということになる。そのため、同性愛者は「愛の可能性がほとんど閉じられている恋人」⁽³⁸⁾とまで言われる。互いに求め合うこともなく、満足し合うこともない「男一女」たちが「ソドム」の町を再建すること語り手の目には「不吉な過ち」⁽³⁹⁾としてしか映らない。彼らは同類からも「排除される」⁽⁴⁰⁾運命にあり、結びつき得ないのである。

同性愛の社会学(2)く結びつく同性愛

ところが、実際には、同性愛者同士は『ソドムとゴモラⅠ』という短いテクストの中でも何度も結合し、シャルリュスとジュピアン、孤独者とその幼友達といったカップ

ルが描かれる。語り手は、同性愛者を「雄の器官が仕切りによつて雌の器官から隔てられている」「雌雄同体」の動植物とも重ね合わせ、他の「雌雄同体」との結合の可能性を指摘する⁽⁴¹⁾。さらに、テクストでは「想像力」によつて性行為の相手の同性愛者を「本当の男」⁽⁴²⁾と思いこむ男性同性愛者の例まで出される。それは一種の「妥協」⁽⁴³⁾、あるいは「中途半端な同意」⁽⁴⁴⁾かもしれないが、「人生の可能性への譲歩」⁽⁴⁵⁾とも言えるだろう。

結びつくのは欲望をもとにしたカップルだけではない。二者以上の集団についても、「控えめで冷静な」⁽⁴⁶⁾集まりから「過激派」⁽⁴⁷⁾と呼ばれる女装をするグループに至るまで様々なヴァリエーションが挙げられる。いずれにしても、同性愛者は集まり、「種族」を形成する。語り手は、「醜い」と同時に「美しい」という「種族」の二重性を示しつつ、社会が同性愛に加える「迫害」や「汚辱」が、逆に同性愛者を「同類」のもとへ集め、彼らはそこで「安らぎ」や「支え」を見出すことを指摘する⁽⁴⁸⁾。「嗜好の、欲求の、習慣の、危険の、修業の、知識の、取引の、用語の同一性の上に」成り立つ、広範囲に渡る、疑われることのない「フリーメーソン」⁽⁴⁹⁾が組織され、その中にいる同性愛者の

生活は、次のように述べられる。

「彼らはみな、自らの秘密を守ることを強いられているが、彼ら以外の人間は疑われないような他人の秘密の分け前を持つており、それは彼らにとって、もつともあり得なさそうな冒険小説をも本当のように思わせる。というのも、この小説のような、時代錯誤の生活においては、大使が徒刑囚の友達であり、貴族の教育によって与えられたある種の自由な歩きぶり、おどおどしたプチ・ブルジョワが持ち得ないような自由な歩きぶりで、大公が公爵夫人のところから出て、ならず者と話をしに行くからである」⁽⁵⁰⁾

同性愛の「種族」⁽⁵¹⁾「フリーメーカーソン」では、階級の秩序は維持されず、「大使」と「徒刑囚」、「大公」と「ならず者」が結びつくのだ。シャルリュスはジュピアンに社交界の人々に話すのと「同じ言語」⁽⁵²⁾で語り、その言動からも同性間の結びつきは積極的に階級を越えると言わんばかりである。このようにして、ジュピアンがシャルリュスを「ベイビー」と呼ぶねじれた関係が生まれる。⁽⁵³⁾

この二人に関して、ジュピアンはシャルリュスの庇護を

受け、社会的に上昇していくことがテキストの終わりでは示唆されているが、「フリーメーカーソン」に入った同性愛者に関して、次のように語られる。

「……」その時から彼らは、このような便宜——商店や大きな会社が個々人の生活を変え、それまでは手に入れるのに大変費用がかかり、見つけるのさえ困難だったものに近づけるようになってくれるというような便宜——を享受する。こうして、一人では群集の中で発見することもできなかった夥しい数のものが、今では彼らを浸すようになるのだ」⁽⁵⁵⁾

同性愛者には、同性間の結びつきを利用して社会的にのし上がり、異性愛者には思いもよらぬほどの「便宜」を「享受する」可能性があることまで指摘されるのである。だが、それは先ほどの引用の言葉を使えば「おどおどしたプチ・ブルジョワ」には理解不可能な最大限の脅威となる。十九世紀後半からの男性の同性愛の顕在化が引き起こしたパニックは、男性同性愛が階級の秩序を混乱させ、延いては国家の解体をも招くという危機感に裏打ちされていたと

考えられる。⁽⁵⁶⁾ このテクストでも、突き詰めれば、同性愛は社会の秩序を覆す力さえ持つものとして捉えられているのだ。

『ソドムとゴモラⅠ』で語られる同性愛は、ここまで見てきたように、「クラゲ」のごとく、相容れない二つの価値を持ち合わせており、解釈の仕方によって何度も反転する。それゆえ、そこには常に二重性が伴っている。「男一女」は男性性と女性性を入れ替わり露呈し、その内部に閉じ込められた女性も優美であると同時にヒステリックである。同性愛者の数は少ないと示唆されつつも、実際は多いと言われる。彼らは他の同性愛者を憎みながらも、引かれ合って、最終的には「種族」を形成する。その「種族」は醜くもあり、美しくもある。一方では罪の意識に苛まれているが、もう一方では開き直り、しぶとく生きのびる。滅びることがほめかされつつも、「ソドム」は繁栄する。このような裏腹な展開に『ソドムとゴモラⅠ』の同性愛の理論は支えられているのだ。同性愛を否定的に扱う言説を積極的に取り入れながらも、時には、巧みに価値の逆転が図られる。同性愛の否定と正当化の間をテクストは、読者

の目もはぐらかしながら行き来する。同性愛を「倒錯」と呼ぶ語り手自身が、言わば、「倒錯」的に同性愛を語っているのである。⁽⁵⁷⁾

語り手の所在

最後に、その語り手の位置にも着目する必要があるだろう。彼は「植物学者」の視点に立って、同性愛とは一線を画したところに身を置き、当事者であるシャルリュスやジュピアンから見られていないことを何度も確認した上で、いかに巧妙に、一方的に彼らを観察するかということに気を配っている。シャルリュスとジュピアンが役者に、彼らの出会いが見せ物になり、それを見つめる語り手が観客となるかのである。念入りに用意されたこの構図によって、彼らを覗き見、盗み聞くことで、当事者とは交わらずに、一人称で同性愛を語ることが可能になる。

ワールドやオイレンブルクの裁判が物語るように、同性愛が一人の人間を社会的に抹殺し得た時代に、一人称で同性愛を語ることはいへん危険な行為であった。それゆえ、同性愛を語りの主体としてではなく、客体として設定することはやむを得ない選択であったのかもしれない。⁽⁵⁸⁾ ところ

が、その語り手のセクシュアリティも安定したものではない。そもそも、同性愛に対する彼の好奇心は凄まじい。

シャルリュスとジュピアンの出会いの場面に彼が遭遇したのは偶然であるとしても、ジュピアンの店で行なわれる二人の情事をあたかもスパイのように盗み聞きしようとするのは彼の意思である。彼は強い焦燥感に苛まれて、シャルリュスとジュピアンの情事の現場へ向かう。⁵⁹それを、語り手自身の内部に隠され、抑圧された同性愛の欲望があけすけに演じられていることへのいらだちと解釈すること也不可能ではない。

さらに、彼のセクシュアリティを考える上で、極めて興味深い一節がある。語り手は、同性愛一般に対して考察を行なう場面の中で、次のように述べる。

「結局、少なくとも彼ら〔同性愛者〕の多くは、他の種族の人々〔異性愛者〕とのやさしく危険な親密性の中で暮らし、その人たちを挑発し、自らの悪徳をまるで自分の悪徳ではないかのように話して戯れるのだが、相手の盲目、あるいは誤りによって、このゲームは容易になり、これら調教師たちが飲みこまれるスキャンダルの日まで、何年も

続けられることもある」⁽⁶⁰⁾

この一節に従うと、異性愛者として同性愛を語る者すべてがその原理から逃れられなくなる。当然、「自分の悪徳ではないかのように」同性愛を語るこの語り手も例外ではない。語り手は「調教師」に、読者は盲目な「他の種族の人々」になり、「ソドムとゴモラー」というテクストそのものが、挑発的な一つの「ゲーム」になってしまう。

このように、「ソドムとゴモラー」では、そこで語られる同性愛の理論だけではなく、語り手のセクシュアリティも裏腹な展開を見せる。一方では、語り手を同性愛の側には置かない構図が念入りに準備されると同時に、他方では「ゲーム」の原則をほのめかすことによって語り手の同性愛を読者にむしる喚起させているかのようだ。だが、ここで問題にしたいのは、語り手が同性愛者であるかどうかではない。それよりも、彼が自らのセクシュアリティに関しても、二重性を持たせ、読者を挑発し、欺きながら、ある種の「ゲーム」を行なっているということが重要なのである。

確かに、「ソドムとゴモラー」で語られる理論の一つ一

つは、当時の医学や性科学の言説と呼応しており、それ自体は決して目新しいものではない。しかし、それでもなお、『ソドムとゴモラー』が同性愛に関する「主要なテキスト」として輝きを失わない理由は、これまで述べてきたように、語り手が矛盾する、場合によっては対立する概念を併用して同性愛を語るそのやり方にあると考えられる。様々な言説の有効性や既成概念の区分に、そして語り手のセクシュアリティにさえも、何度も揺らぎが与えられ、その枠組みは攪乱される。言い換えれば、同性愛の理論そのものにおいても、また、それを語る語り手の位置においても、繰り返し仕掛けられる裏腹で「倒錯」的なこの「ゲーム」こそが、『ソドムとゴモラー』の上に読者の目を釘付けにする原動力なのである。

- (1) George Stanbolian & Elaine Marks (ed.), *Homosexualities and French Literature: Cultural Contexts/Critical Texts*, Cornell University Press, 1979, p.24-5. なお、タイトルの《Homosexualities》とぶつ複雑形が示すように、執筆者たちは同性愛を「異性愛と対立する一つの事象として捉えるのではなく、差異や多様性によって語

ろうとする。

- (2) *Ibid.*, p.25.
(3) André Gide, *Corydon*, folio, Gallimard, 1991, p.8.
(4) Sidonie-Gabrielle Colette, *Le Pur et l'Impur*, Pléiade, 1991, p.628.
(5) *Articulations of Difference* の序文で、Fisher と Schehr は、英米文学と比較して「フランス文学は同性愛を完全にマージナルなものにはしなかった」と述べる。また、その背景として「英語圏では同性愛は違反と見なされ、「クローゼット」や「カミング・アウト」という言葉が示すように、抑圧と爆発という構図が存在するのに対し、フランス語圏には公／私の領域、公／私のディスクリールという区分が存在し、私の領域にある限り同性愛はそれほど問題がないものとして見なされたことを指摘する。(Dominique D Fisher & Lawrence R Schehr (ed.), *Articulations of Difference: Gender Studies and Writing in French*, Stanford University press, 1997, p.2-3, 14-5.)
(6) Marcel Proust, *Sodome et Gomorrah I*, in *À la recherche du temps perdu III*, Pléiade, 1988, p.3. (以下『ソドムとゴモラー』からの引用は一九八八年に出されたブレイヤード新版『失われた時を求めて』全四巻のう

ちの第三巻による)

(7) *Ibid.*, p.6.

(8) *Ibid.*, p.3.

(9) *Ibid.*, p.16.

(10) 「第三の性 (le troisième sexe)」とは、十九世紀のドイツの文筆家 Ulrichs が打ち立てた概念で、男性同性愛者は「男性の肉体に女性の魂が宿った存在 (anima muliebris virili corpore inclusa)」と定義された。この概念は Hirschfeld や Carpenter にも受け継がれ、当時、大きな権威となった。(Jeffrey Weeks, *Sex, Politics and Society: The Regulation of Sexuality Since 1800*, Longman, Second Edition, 1989, p.104.) 一方、シッドは「コリドン」で「第三の性」を退けようとする。セジウィックは「クローゼットの認識論」の中で、同性愛／異性愛の定義に関する見解には、「二種の矛盾するジェンダーの比喩」が支配的であることを指摘する。彼女の言葉に従えば、一つは「第三の性」のように、ジェンダー倒錯、つまりジェンダーの境界を横断するものとして同性愛を語る「ジェンダー移行性 (transitive)」であり、もう一つは「コリドン」で示されるように、「同じジェンダー内での結びつきによって同性愛を語る」「ジェンダー分離主義 (separatist)」である。さらに「彼女は、

この両極にある二つが、矛盾し、重複し合いながらも、同時期に並行し、共存してきたことを強調する。(Eve Kosofsky Sedgwick, *Epistemology of the Closet*, University of California Press, 1990, 外岡尚美訳「クローゼットの認識論」青土社、一九九九年、一二三―一二七頁)

(11) *Sodome et Gomorhe* I, p.6

(12) ジュピアンは「裏切られた色気たっぷりの大年増 (une grande coquette trahie)」とも言われる。(Ibid., p.11.)

(13) *Ibid.*, p.8 *Compagnon* がブレイヤット版の註で論じるように、「失われた時」において、男性同士という同質性 (ジェンダー分離主義) によって結びつく「男性同性愛者 (homosexual)」とは、「倒錯者 (invert)」(「男一女」) が自らそうでありたいと望む幻想であるならば (Ibid., p.1217)、「シャルリュスがこの場面で「雄」を演じる理由はわかる。だが、それならばなおさら、彼が「雌」であるジュピアンを求めるはずはない。『ソドムとゴモラー』の「男一女」はジェンダー倒錯 (ジェンダー移行性) に立脚しつつも、時にはその枠組みを大幅にはみ出て、「はるかに複合的で、矛盾する一群の隠喩的モデル」(セジウィック、前掲書、三二〇頁)を表出

- 48°。
- (14) *Sodome et Gomorrie I*, p.22.
- (15) *Ibid.*, p.23.
- (16) *Ibid.*, p.9.
- (17) 《Beauté》という語は、『ソドムとゴモラ I』の六七二九頁で。
- (18) 女性性を露呈していたシャルリュスも「まるで自然のままの状態 (comme au naturel)」にあらたと述べられていた。(Sodome et Gomorrie I, p.6.)
- (19) 『ソドムとゴモラ I』二八、三〇、三二頁など。この問題に関しては Marcel Muller, 《Sodome I ou la naturalisation de Charlus》, *Poétique*, NO 8, 1971, p.471.
- (20) *Sodome et Gomorrie I*, p.7.
- (21) *Ibid.*, p.28.
- (22) *Ibid.*, p.18.
- (23) *Ibid.*, p.26.
- (24) *Ibid.*, p.16.
- (25) *Ibid.*, p.12.
- (26) *Ibid.*, p.21.
- (27) Compagnon はシャルリュスには「二つの人格」「二重の人格」があると言う。(Antoine Compagnon, *Proust entre deux siècles*, Seuil, 1989, p.267.)
- (28) *Sodome et Gomorrie I*, p.29.
- (29) 性科学者 Kraft-Ebing, Moreau, Tarnowsky など同性愛「遺伝」退廃を結びつけた。(J. E. Rivers, *Proust and the Art of Love/the Aesthetics of Sexuality in the Life, Times and Art of Marcel Proust*, Columbia University Press, 1980, p.208-9.)
- (30) *Sodome et Gomorrie I*, p.16. 本論でも後で論じるが、語り手は同性愛を一つの「種族 (race)」と見なす。Foucault は「同性間 (特に男性同士) のセクシエアリティに関して、それまではソドミーという行為に決定付けられていたが、十九世紀後半になると、個人の内部に存在する性質 (「内的な両性具有、魂の雌雄同体性」) を同性愛の起因とする見解が生まれた」ことを指摘し、「かつてソドミーを行なう者 (sodomite) は性懲りもなく異端者であったが、今や同性愛者 (homosexuel) は一つの種 (espèce) になった」と述べて。(Michel Foucault, *Histoire de la sexualité I, La Volonté de savoir*, Gallimard, 1976, p.59-60.) Weeks も同性愛を人格と結びつける見解の出現が「性に関する新たなアイデンティティの形成を導いたことを強調する」。(Weeks, *op.cit.*, p.102.) 『ソドムとゴモラ I』の語り手も「同性愛者の内部の「気質」に同性愛の原因を求め、異性愛者を「他の種

族の人々 (*Sodome et Gomorrhe I*, p.19.) と呼び、同性愛／異性愛の固定的で明確な区分を示唆している。

(31) オスカー・ワイルドは同性愛を「あえてその名を告げぬ愛」と言い、プラトンを援用して、その正当性を力説した。(Rivers, *op.cit.*, p.114. の引用より)

(32) 『コリドン』では第四のダイアログで、古代ギリシアの同性愛を引き合いに出し、成年男性と少年の間の「ペデラスティ」の擁護が図られるが、その試みは空虚な理想論に陥ってしまう。(Gide, *op.cit.*, p.107-28.)

(33) *Sodome et Gomorrhe I*, p.18. 註30で示したように、語り手は、基本的には主体の内部に同性愛の原因を追求する。つまり、『ソドムとゴモラー』を支配するのは本質主義的な見方であるが、セジウィックはこの一節を引いて「構築主義的見解の要素」も見られると言う。(セジウィック、前掲書、三一九頁) さらに、彼女は、本質主義／構築主義を、同性愛／異性愛の定義についての「マイノリティ化 (minoritizing) の見解」／「普遍化 (universalizing) の見解」と置き換え、註10で触れた「ジェンダー移行性」／「ジェンダー分離主義」同様、同性愛／異性愛の定義をめぐって、これら双方の見方がダイナミックに拮抗し、その矛盾した共存がパフォーマティブな場となることも強調する。(セジウィック、前

掲書、九一―一八、六四―五頁)

(34) *Sodome et Gomorrhe I*, p.19.

(35) Cocteau も『白書』(一九二八年)の中で「ペデラストはペダラストを見分ける」と言う。(Jean Cocteau, *Le Livre blanc, in Romans, Poésies, Œuvres diverses, La Pochothèque*, 1995, p.195.) さらに、この原則が絶対ではないことも示唆される。

(*Sodome et Gomorrhe I*, p.20.)

(36) *Ibid.*, p.26.

(37) *Ibid.*, p.17-8.

(38) *Ibid.*, p.17.

(39) *Ibid.*, p.33.

(40) *Ibid.*, p.17.

(41) *Ibid.*, p.28, p.31.

(42) *Ibid.*, p.17.

(43) *Ibid.*, p.28.

(44) *Ibid.*, p.29.

(45) *Ibid.*, p.32.

(46) *Ibid.*, p.20.

(47) *Ibid.*, p.21.

(48) *Ibid.*, p.18.

(49) *Ibid.*, p.18.

- (50) *Ibid.*, p.19.
 (51) *Ibid.*, p.12.
 (52) *Ibid.*, p.11, p.14.
 (53) *Ibid.*, p.13.
 (54) *Ibid.*, p.31.
 (55) *Ibid.*, p.21-2.
 (56) Hocquenghem はワイルドやオイレンブルクの裁判は、男性同性愛に「社会階層から離脱した」嗜好というイメージを付し、男性同性愛者は階級の平衡を壊す「社会的な災い」と見なされるようになったことを指摘する。
 (Guy Hocquenghem, *Race d'épi: Un siècle d'images de l'homosexualité*, éditions libres/hallier, 1979, p.52.)
 (57) Rivers は「語り手が《inversion》及びその派生語を好んで用いることを指摘した上で、作品中でもっとも「倒錯した見方」をする人物が彼だと言う。(Rivers, *op. cit.*, p.215-6.)
 (58) シッドの日記によれば、ブルーストはシッドと同性愛について議論した際に、「あなたはすべてを語ることができます(……)ただし決して《私》という一人称で言わないという条件で」と語った。(André Gide, *Journal*, 1889-1939, Pléiade, 1951, p.692.)
 (59) *Sodome et Gomorhe I*, p.9-10.
 (60) *Ibid.*, p.19.

二〇〇一年九月十九日受稿
 二〇〇一年十二月二十日レフェリーの審査
 をへて掲載決定

(二橋大学大学院博士課程)